
カストルの心とポルックスの空

スネお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カストルの心とポルツクスの空

【Nコード】

N8975N

【作者名】

スネお

【あらすじ】

ユリは、歌手を目指すフリーター。タダシは、自衛官。ともに24歳で出会う。

人生の歯車は、いつからか、想像を超える組み合わせり方をしたまま回りだす。

誰も知らない間に。

50年後 1月(前書き)

初めて書く小説です。誤字脱字があるかと思いますが、暖かい目で読んでやってください。

50年後 1月

50年後・1月 「冬」

最近眠りは、いつも浅い。

こうやって年齢を重ねた今になってよくよく思い返してみても、深く寝具に包まれ穏やかな気持ちで、安心して眠りに落ちていく感覚は、あまりなかった気がする。

ただ普通の幸せを、思い出せないだけなのかもしれない。

深く考えれば考える程、ただでさえ少ない睡眠時間が更に減りそうな気がして考える事を辞めたかった。

だけど、今まで気にも留めなかったあの人の言葉や行動が、些細な事でも気になってしまう。

あの人、今の病気になったからとかでは無い。今の病気の事は誰よりも私が支えたいと強く思っているし、昔あの人在必死になって私を助けてくれたように今、私が支えて助けたいのだ。

どれくらい時間が経ったのかは解らない。起きていたような寝ていたような曖昧な感じだ。

ふっと隣を見ると、あの人はいなかった。

目を強く閉じて奥歯をかみ締める。自分に対する歯痒さで胸がズキンとした感じになった。

隣に寝ていたあの人、ベツトを離れるのを解らないほど眠っていた自分が恥ずかしかった。

眠る前まであの人、事ばかり考えていたのに。

とりとめも無い事ばかり考えてもどうしようもないので、すぐにベツトをでた。

暖房のタイマーはすでに切れていた。掛け布団をめぐり上げただけで真冬の寒さが覆い被さってきたようだった。

焦っていたため、照明も点けず足元のスリッパを探したがとうとう足先でスリッパを見つけた事が出来なかった。素足のまま部屋を出た。

フローリングの床は、あまりにも冷たく痛かった。寒さのせいかわるめてしまった。壁に手をつくると間接照明に照らされた花瓶が目に入った。

一瞬あの人が床暖房を設置したがっていた3年前の冬を思い出した。あの人が、床暖房を諦めたのは私の欲しがっていた薩摩切子の花瓶を買う事に二人で決めたからだ。

今歩いている廊下にそれはある。間接照明を浴びながら紫色のグラデーションと氷の様な透明で鋭利な模様を輝かせ自分の存在を照明しているような薩摩切子の花瓶。

痛ささえ感じる床を歩いても床暖房と薩摩切子の天秤は、薩摩切子が乗った皿が下がったままである。その花瓶は、輝きながらあの人の笑顔も一緒に写してくれる。

今の病気になって我を失っていてもあの人が優しい顔で花瓶の前に立っている事が何度かあった。

生憎今回は、立っていなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8975n/>

カストルの心とポルックスの空

2010年10月10日03時51分発行